

割箸論争

割箸生産は製材端材の有効活用法のひとつとして発展したとされるが、戦後の高度経済成長に伴って需要量が増加すると、大径木のロータリーレース単板から大量生産されるようになり、現在では国内需要の9割以上を安価な中国産が占めている。また、最近では、ファーストフード店など、樹脂製のリターナブル箸を提供するところが増えている。私は、この樹脂箸がどうも苦手で、箸の先端がザラザラに加工されているものの、麺類はツルツル滑って食べにくい。特にカレーうどんは大変で、胸元が黄色のドット模様となり妻に叱られる。

国産割箸、中国産割箸、樹脂箸の経費を推定したところ、それぞれ1,000膳あたり4,100円、1,436円、391円程度であるから、外食店にとって経費節減のための選択であるなら、樹脂箸が主流となるのも仕方がないのかも知れない。一方、木製箸から樹脂箸への代替を「森林保護」「地球環境への配慮」と説明している事業者も少なくない。「木材利用＝森林伐採＝環境破壊」という誤った認識によって木材利用が否定されていることは残念である。確かに木材を利用するためには樹を伐採する必要がある。しかし、割箸をやめて木材利用を減らすことが、本当に「森林保護」や「地球環境保全」につながるのだろうか。

オイルショックを経験した1970年代頃から、「マイ箸運動」を皮切りに割箸の是非を問う論争が繰り広げられている。当時の論点は、“割箸は便利だし衛生的である” vs “資源の無駄使いでもったいない” のジレンマであったが、1990年代に地球環境問題がクローズアップされると、“地球温暖化対策”やその要因として“森林破壊”などが加わりトリレンマとなり、さらには経済性なども含め、より複雑な論争に発展している。例えば、グーグルで「割箸」×「環境破壊」を検索すると約19,500件もの記事がヒットする。しかし、定性的な議論が多く、科学的根拠に基づいた定量的な評価の事例は少ないようである。

そこで、ライフサイクルアセスメントや産業連関分析によって、国産割箸、中国産割箸、樹脂箸1,000膳あたりの生産～使用～廃棄に至る環境や経済への影響を試算してみた。環境影響について、二酸化炭素などの温室効果ガスの排出量は、端材使用の国産割箸0.355<間伐材使用の国産割箸0.788<樹脂箸1.26<中国

産割箸1.64kgCO₂-eqの順であった。中国産割箸については原料の調達による影響が大きく、樹脂箸については使用段階(洗浄)での排出量が全体の9割弱を占めていた。経済波及効果について、国産の割箸と樹脂箸の粗付加価値誘発額は、それぞれ1膳あたり3.8円、1.2円と試算された。すなわち、国産割箸は他と比較してコストは高いが、環境影響が少なく、経済波及効果が大きいことが分かった。皆さんはこれらの試算結果をどのように受け止められるだろうか。

さて、話は変わるが、クイズを一問。紙が木材から作られていることはご存じと思うが、割箸1膳分の木材からティッシュペーパーは何枚ぐらいできるだろうか？……10枚程度かな？と感じられた方が多いのではないだろうか。

木材は、セルロース(約50%)、ヘミセルロース、リグニンと呼ばれる成分からできていて、木材からセルロースだけを抽出したものを「パルプ」と呼び、これが紙の原料となる。製紙の歩留まりを100%とすると、割箸1本(=割箸1膳の約半分)と同じ重さの紙が生産されることになる。割箸1本の重さを量ってみると……割箸1膳分の木材から作れるティッシュペーパーは2枚程度である。

マイ箸でラーメンをすすった後、ティッシュでチュチュっと口元を拭い、コップの水で濯いだマイ箸の水滴をもう一枚のティッシュで拭って、ポイっとゴミ箱に投げ込む。それだけで割箸と同じ量の木材を使ったことになる。本来の「マイ箸運動」は、豊かな「生活」を求めるあまり「資源」を浪費することへの反省を促したものであるから、そのことを否定するつもりもなければ、便利なティッシュペーパーを非難するつもりもない。しかし、“割箸は森林破壊の元凶だ”と言うならば、食事の後に続けて2枚引き抜いてしまうティッシュペーパーの向こうに森が見えないのだろうか。

割箸の是非を問う、いわゆる『持続可能性』に関する議論は、1980年代までの単純な『資源保護』に加え、『地球環境』という新たな概念が一般的となり、さらには『経済』や『文化』にまで議論が波及するなど複雑化しており、もはや一般普遍解を求めることは無意味のようである。それぞれが、真実を正しく理解し、柔軟な視点で判断し、賢く行動するほかないようだ。

それはともかく、カレーうどんは割箸で食べたい。

(東京大学 教授 井上雅文・いのうえ まさふみ)